

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590085

研究課題名(和文)ハンセン病問題の現状をめぐる日本・韓国・台湾の国際比較研究

研究課題名(英文)Comparative Research on the Issues of Hansen's Disease among Japan, Korea and Taiwan

研究代表者

福岡 安則 (FUKUOKA, Yasunori)

埼玉大学・人文社会科学研究科(系)・名誉教授

研究者番号：80149244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：ハンセン病問題での韓国調査は2012年以来4年連続で実施し、黒坂愛衣と金香月が「韓国ハンセン総連合会」の機関誌『ハンセン』に調査報告を韓国語で連載してきた。台湾調査は2014年と15年の2回実施した。また、2015年5月に東京で開催された第11回「ハンセン病市民学会」の実行委員会事務局長を福岡安則が務め、「韓国ハンセン総連合会」と台湾「楽生保留自救会」のリーダーたちを招いて、交流を深めた。日本が植民地支配下に造ったハンセン病療養所である韓国のソロクト病院が2016年5月に「百周年」を迎えて開催された国際学術集会で、福岡が報告した。

研究成果の概要(英文)：We have conducted field-work and life-story interviews on the issues of Hansen's Disease in South Korea for four consecutive years since 2012. Ai KUROSAKA and Hyangwol KIM's reports has been published serially in HANSEN, organa bulletin of the Korean Federation of HANSEN Association, in Korean. Also, we have conducted field-work and interviews on the same issue in Taiwan in 2014 and 2015. Yasunori FUKUOKA exerted himself as general director of the executive committee of 11th Hansen's Disease Association for the People in Japan, and invited the leaders of the Korean Federation of HANSEN Association and the Taiwan Losheng Sanatorium Preservation Society in order to deepen the sense of solidarity. In May 16-18, 2016, Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference was held in Korea. At the conference FUKUOKA gave speech on a current status of Japan and Korea.

研究分野：社会学

キーワード：ハンセン病 国際比較 ソロクト 定着村 楽生院 フィールドワーク 聞き取り ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の福岡安則と研究分担者の黒坂愛衣は、日本国内のハンセン病問題研究では、すでに十数余年の蓄積をもつ。福岡は、ハンセン病国賠訴訟の2001年の熊本地裁判決を受けて、厚労省と原告団・弁護団・全療協(全国ハンセン病療養所入所者協議会)の話し合いによって設置された「ハンセン病問題に関する検証会議」(2002年10月~2005年3月)の「検討会委員」を委嘱され、『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』の作成にかかわった。福岡は黒坂とともに、ハンセン病療養所入所者、退所者、家族、その他関係者からのライフストーリーの聞き取りを精力的に積み重ね、『栗生楽泉園入所者証言集』(全3巻、2009、創土社)などを上梓してきた。

そのようなわたしたちが、2013年5月に熊本「菊池恵楓園」で開催された「第9回ハンセン病市民学会」で、連携研究者となる一盛真と森川恭剛と顔を合わせたとき、韓国や台湾をはじめとする海外のハンセン病問題について、まともな調査研究がなされていないことに気付いて愕然とした。日本の植民地支配時代、韓国も台湾も、日本の内地と同じく強制収容のための施設として、それぞれ「小鹿島慈恵病院 更生園」(現「国立ソロクト病院」)、「楽生院」(現「楽生療養院」)が造られた。植民地支配終了後、日本では隔離政策の根拠となった「らい予防法」が1996年まで続いたのに対して、韓国と台湾では1960年代前半で隔離政策は終わった。この時期の違いが、現在の各国のハンセン病回復者を取り巻く社会的条件に違いをもたらしていることを予想させる。各国とも生存するハンセン病回復者たちが著しく高齢化している現状にあって、当事者からの詳細なライフストーリー聞き取りを集中的に蓄積していく必要がある。いまを逃すともはや次の機会はない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、隔離政策によって罹患者とその家族が受難したハンセン病問題について、日本・韓国・台湾の国際比較研究の確かな足場を築くことである。各国とも生存するハンセン病回復者たちが著しく高齢化している現状にあって、研究課題は次のように設定される。(1)各国の当事者の体験をライフストーリーの形で記録すること。もはやラストチャンスである。(2)各国とも、ハンセン病回復者たちは、「ここまで生きてきてほんとうによかった」と思いながら最期を迎えることができるかどうかの瀬戸際にいる。国際比較研究を通して、それぞれの経験の共有化のなかから、いま、これからをどうするかという差し迫った課題に応えうる解を探し求めること。

3. 研究の方法

当然、調査は韓国語、中国語を用いて実施されるが、韓国調査では在日コリアンで、福岡が指導教員をつとめた埼玉大学大学院博士後期課程中退の金香月が、ソウル在住経験もあり、通訳の仕事をしているので、彼女に全面的に世話になった。台湾調査でも、台湾在住でハンセン病問題にかかわる宗田昌人と懇意になれて、調査時の通訳の問題は解決した。

われわれの調査研究は、アウトサイダーとしての研究者が被差別のマイノリティたちが暮らすフィールドにツカヅカと入っていくというかたちではなく、できるかぎり、マイノリティ当事者たちと手を携えての調査研究として遂行したいと心がけてきた。具体的には、韓国調査では、予備調査段階の最初の2年、日本のハンセン病療養所からの退所者がわたしたち調査チームに同行してくださった。おかげで、きわめてスムーズに現地のフィールドに受け入れられることになった。

最終的に研究成果をまとめる段階では、福岡がこれまで開発してきた聞き取り事例の「多事例対比解読法」を、国際比較研究の場面でも全面的に展開したいと考えている。「多事例対比解読法」とは、当事者からの聞き取りを散発的に行うのではなく、聞き取り事例をできるだけたくさん蓄積しつつ、それらを相互に突き合わせることで、そこに浮かび上がる意味連関を読み解くという方法である。

4. 研究成果

まずは、韓国調査の報告から。わたしたちは2012、13年と、予備調査を実施している。2012年夏、全羅南道高興郡の鹿洞から小鹿大橋を渡って、「国立ソロクト病院」へ。園内のあるハルモニの寮舎に2晩泊めていただいた。その後、全羅北道の益山に向かい、2つの定着村(「益山農園」「クモ農場」)を訪問。2013年夏には、京畿道の「抱川長者マウル」、忠清北道の「忠光農園」、ハンピツ福祉協会(現、韓国ハンセン総連合会)運営の「Evergreen Welfare Center」を訪問。

2014、15年には、この「挑戦の萌芽」の科研費で韓国調査を実施。2014年夏は、慶尚北道の「聖信マウル」「漆谷マウル」、ついで安東市の「星座園」を訪問。2015年夏は、ソウル近郊に所在する「塩光マウル」「富平マウル」「清川マウル」「聖生マウル」を訪問。また、天主教の施設「聖ラザロ園」を訪問。

わたしたちは、この4度の韓国訪問で、「国立ソロクト病院」10カ所の「定着村」、長い歴史をもつ「宗教的民間施設」2カ所、そして、当事者運動によって建設・運営されている「新たな高齢者施設」を訪ねて、入所者から聞き取りをさせていただいた。「定着村」だけをとっても、現時点で全国に89カ所あるうちの、ごく一部を訪問したにすぎないけれど

も、いくつかの点では見えてきたものがある。

ハンセン病病歴者がどこでどう暮らしているかという点で、韓国と日本ではその様相を異にする。2011年現在、韓国内の「ハンセン人」総人口は13,039人。内訳は、「在家」7,410人、「定着農園」4,489人、「入院保護」1,140人（うちソロクト560人、民間保護施設580人）。それに対して、日本では、「らい予防法」が廃止された1996年の時点で、ハンセン病登録者5,881人のうち、じつに9割強の5,413人までが、国立もしくは私立の療養所に在籍していた。2001年の熊本地裁での原告勝訴のあと「退所者給与金」制度ができたことにより新旧の「退所者」が増加。また、それまでまったく隠れていた「非入所者」の存在が明らかになってきたこともあって、日本のハンセン病病歴者全体に占める「入所者」の割合はその比率を減じた。現時点では「入所者」約1,600人、「退所者」約1,100人、「非入所者」約500人、といったところである。韓国では、「在家」として一般社会で暮らす人びとが半分以上を占め、「定着村」で暮らす人びとが3割強。「ソロクトその他の施設」で暮らす人びとは1割にも満たない。それに対して、ある時期までの日本では、ハンセン病病歴者たちは圧倒的に「ハンセン病療養所」の入所者として生きてきた。

その差をつくりだしたのは、やはり、国家によるハンセン病に対する「強制隔離政策」の貫徹度であろう。韓国では、解放後もしばらくは日帝支配下の悪いやり方を踏襲していたとはいえ、日本に比べればその徹底度は低く、かつ、1960年代には隔離政策に終止符が打たれ、「定着村事業」が展開されていったのに対して、日本では、戦前のみならず戦後にも官民一体となった「無瀬島運動」が執拗に展開された。それは、自然治癒してもはや治療の必要のない者も含めて、すべてのハンセン病患者を「療養所」に追い立てるものであった。1960年代なかば以降、「患者作業の返還」が進むにつれて、療養所からの「外出制限」などにも一定の緩みが出てくるものの、隔離政策に終止符が打たれたのは、やっと、いまから20年前、1996年の「らい予防法」の廃止によってであった。

このような日本と韓国での「隔離政策」の貫徹度の相違は、当事者運動のありようの違いをももたらした。日本では、当事者運動はもっぱら「国立療養所の入所者」によって担われてきた。戦後まもなくからの「全患協」、そして今日の「全療協」による運動がそれである。全患協運動は、1953年の「らい予防法改正闘争」に敗北した後、強制隔離を規定した予防法の抜本的改正要求はいったん引っ込み、療養所内の処遇改善要求闘争に力点を置いてきた。それに対して、韓国では、当事者

の多数は「在家」の人たちと「定着村」の人たちであった。「在家」の人たちは、社会のなかに、バラバラに、隠れて住む。組織化された運動には馴染まない存在であった。必然的に、当事者運動の担い手は「定着村」に暮らす人びととなり、早くからその全国組織が形成されてきた。「韓星協同会」から始まり、「ハンピツ福祉協会」を経て、現在の「韓国ハンセン総連合会」に至っている。

わたしたちはこの4年間で、韓国内の10の定着村を訪問してきた。どこの定着村を訪ねても、畜産を生業として自分たちで収入を得て生きてきた《誇り》と、子どもを産み育ててきた《自信》を、その語りから窺えた。自活と子育て、このいずれもが、日本のハンセン病患者の大多数が体験する機会自体を奪われてきたものである。しかし現在、韓国の定着村も、いろんな壁にぶつかっている。その場合、農村部にある定着村とソウル近郊にある定着村では、置かれている状況が異なる。農村部の定着村は、いまなお概して、畜産を基盤にしている。ただし、マウル全体として、畜産がうまくいっているところと、必ずしもそうではなさそうところがあった。何が問題かという、養豚などの場合では、輸入肉との競合の問題がある。養鶏では、鳥インフルエンザの脅威がある。後継者の問題も大きい。

日本のハンセン病療養所入所者の平均年齢84歳と比べれば、韓国のハンセン人一世たちの平均年齢は10歳ほど若いと思われるが、それでも確実に高齢化が進行している。そのとき、定着村自体が十分な経済力をもたなければ、年老いたハンセン人たちは「国民基礎生活保障」に頼らざるをえない。日本の場合、療養所の「入所者」だけでなく、「退所者」であっても特別施策による「給与金」を受給できるようになったが、韓国の「国民基礎生活保障」は一般施策である。はたして、ハンセン人が老後を不安なく暮らしていけるだけの保障になっているのだろうか。

ソウル近郊の定着村では、畜産と環境保全とがぶつかりあう矛盾が、農村部よりも早い時点で顕在化した。わたしたちが訪問した京畿道の5つの定着村のどこも、もはや畜産をやっていなかった。ある定着村は、貸し工場の時期を経て、「定着村まるごとの土地」を企業に売却することを選択した。いまでは、定着村のあったところは高級高層アパートが林立している。そして、定着村の元住民たちは市内のアパートに分散居住しながら、定着村のあった隣接地にビルを所有し、貸し店舗業と病院経営をしている。その収益を、42戸からなる定着村の会員が分け合っている。ハンセン人の姿形はどこにも見えない。しかし、定着村で培ってきたハンセン人たちのネット

ワークはしたたかに息づいている。あとの4つの定着村は、貸し工場をマウルの仕事としていた。しかし、そこでも、うまくいっているところと、壁にぶつかっているところとがあるように見えた。ある定着村では、近くに新たな産業団地ができるや、「80 あった貸し工場のうち60がそちらに移ってしまった」という。ほかの定着村でも、「土地建物自体の売却」が進んでいるところもあったし、定着村内の道路には無秩序に車が駐停車されていて、必ずしも統制がとれているとは思われないところもあった。そのようななかで、目を見張ったのは、2015年夏の調査で日本に帰国する前日、韓国ハンセン総連合会の李吉龍会長に焼肉の昼食をご馳走になっているとき、李会長が「きょうの午後はどこか観光でもされますか？」と言うのに対して、わたしたちが観光にはまったく興味を示さなかったのを見て、「じゃ、わたしの出た定着村に、いまから行きますか？」とご案内していただいた「聖生マウル」であった。聞き取りをする時間もなく、視察だけに終わったフィールドワークであったが、室内装飾家具に特化して工場誘致をしてきた結果、マウルの中心部にはきらびやかな展示販売場もできていて、マウル内の工場はどこも活気に満ちていた。マウル内には、外国人労働者のための宿舎も整備され、異文化共生センターまで存在した。一見して魅力あふれる定着村とお見受けし、あらためてこの定着村での集中的なフィールドワークを実施したいと考えている。

農村部にせよソウル近郊にせよ、明らかに困難に直面している定着村であっても、お会いしたみなさんの顔が明るく、希望に満ちていることが印象的であったことは追記しておかなければなるまい。ひとつには、定着村の活動を支えている人たちの年齢が、日本と比べてははっきりと若いということがあるように思う。韓国の定着村では子どもを産み育てることができた。だから、いま、定着村を支えている人たちのなかに、ハンセン二世の姿がある。ある定着村では、「代理」と呼ばれる若い女性は、彼女のオバの夫がハンセン人で、彼女自身も小さいときは定着村で過ごした経験をもつ。また、ハンセン一世であっても50代はじめの若い里長にもお会いした。日本のハンセン病問題の当事者運動の担い手の高齢化と比べると、その違いは顕著である。

ハンセン病患者が、人生の最後の局面を“ここまで生きてきてほんとうによかった”と思いながら過ごせるためには、生活を支える金銭の問題だけでなく、どのような場を「終の棲家」とするかという問題がある。韓国の定着村の場合、「益山農園」には、以前から自主運営してきた「王宮福祉院」がある。わたしたちがお訪ねしたとき、各部屋からハルモ

二たちが出てきてくださったが、どのお顔も明るかったのを覚えている。「漆谷マウル」にも自主運営している養老院が3棟あった。ただし、高齢者施設を自主運営できるだけの余力のない定着村も多いと思われた。

その場合、どうするか？ ひとつの選択肢は「国立ソロクト病院」に移り住むことであろう。じっさい、2012年にお訪ねしたとき、ソロクトの金明鎬自治会長はわたしたちにこう述べた。「ソロクト病院には現在589人が暮らしている。今年に入って50人が亡くなったが、新しく入った人が53人いる。韓国には定着村が91カ所あって、十分な医療や介護が受けられないところも多く、高齢になって、そこから国内唯一の国立施設であるソロクトへ移ってこられる方がたくさんいる」と。

たしかに、「忠光農園」でお会いした60代の男性は、「老後の心配はしていない。病気や認知症になったら、ソロクトへ行けばいい。わたしはあそこで充実した青年期を過ごしたから、拒否感は全然ない」と話された。しかし、「クモ農場」では、わたしたちの「ここからソロクトに戻りたいという方はいますか？」との質問に、「ここはいませんね。戻りたいという人は1人もいないでしょう」との返事であった。わたしたちが訪ねた定着村では、全体的に、老後をソロクトで過ごすという考えに否定的な意見が多かったように思う。

事情は日本でも同様である。退所者の人たちに「もっと年をとって、身体が不自由になったら、どうしますか？」と尋ねると、「療養所に戻りたい」と答える人と、「療養所には戻らない」と言う人が拮抗しているのだ。この日本の「退所者」たちの互いに相容れない意識は、「入所者」たちからの聞き取りで語られる、“ここにに入れてもらったおかげで、いまこうして生きていられる”との「感謝の語り」と、“ここに閉じ込められたせいで、わたしの一生は台無しにされた”との「怒りの語り」に、びったり対応している。「怒りの語り」を語る人びとは、社会のなかで自分はこんなことをして生きていきたいという夢をもっていたのに、ある日、強制収容されて、療養所に閉じ込められた体験をもつ。あるいは、療養所に収容されたときにはすでに無菌、自然治癒していて、療養所でハンセン病治療を一度も受けたことがなかったりする。それに対して、「感謝の語り」を語る人びとは、ハンセン病の発症が地域社会の人びとに知られ、社会のなかから自分の居場所を奪われてしまった体験をもつ。あるいは、家族に匿われているあいだは治療の方途がなく、明日をも知れぬ重い症状になってから療養所に収容され、そこで一命を取り留めたていたりする。

「怒りの語り」も「感謝の語り」も、いずれも、強制隔離政策と無癩県運動によってつく

り出された意識であるが、「怒りの語り」を語る人びとがハンセン病療養所を「アサイラム」として生きた人びとであるのにたいして、「感謝の語り」を語る人びとはハンセン病療養所を「アジール」として生きた人びとである、とすることができる。「アサイラム」(英語で“asylum”)とは、外の社会では誰もが享受できるはずの自由を奪われた空間、ひとを閉じ込める空間のことだ。「アジール」(ドイツ語で“Asyl”)とは、外の社会の迫害から身を守ってくれる聖域であり、逃げ込む場所のことだ。この2つの言葉が、ギリシア語の語源に遡れば、同一の言葉だったというのが面白い。「退所者」は、このような療養所への相異なる入所体験を抱えたまま、療養所を退所し、社会で暮らしている。療養所を「アサイラム」として体験したひとと、「アジール」として体験したひとでは、コミュニケーションは成り立たない。生きた世界が違うのだ。だから、前者の体験をした人が、「いずれは療養所に戻るつもりだ」と言う人に、「目を覚ませ。あんな酷いところに戻るなんて、おまえはどうかしてるぞ!」と、いくら説得しても、その声は届かない。逆に、後者の体験をした人が、「療養所には死んでも戻らない」と言う人に、「いつまでも昔のことにこだわらないほうがいいよ」と言っても、怒りを買うだけだ。

韓国のハンセン人で、「ソロクトには死んでも戻らない」と言うひとと、「いずれはソロクトに行きたいと思う」と言うひとの意識の構造は、日本の「退所者」たちの意識のありようと基本的には同一だと思う。まだ隔離が厳しかった時代には、小鹿島から対岸の鹿洞まで、命懸けで泳ぎ渡ることをした人がいたぐらい、ある人たちにとってはソロクトは憎しみの対象だった。他方で、ある人たちにとっては、外の社会では学校に通って勉強することが許されなかったのに、まがりなりにも学校教育を受けることができ、スポーツも楽しめる充実した生活を保証してくれるところがソロクトであった。ただ、日本よりも事情を複雑にしているのは、「定着村事業」の始まりの時期に、自活して生きていけと、ソロクトを追い出される体験をした人たちがいるということである。

さて、考えておくべきは、日本の「退所者」たち、韓国の「定着村」で暮らす人たちの老後の問題だ。わたしたちの考えでは、「療養所」ないし「ソロクト」を社会の荒波から自分を守ってくれる「アジール」として表象できる人は、誰にも遠慮することなく、老後を「療養所」ないし「ソロクト」で過ごせばよいと思う。問題は、「老後を療養所でソロクトで過ごすのは、まっぴらゴメンだ」と言う人たちだ。これを“我が儘”と評してはならない。療養所/ソロクトを「アサイラム」として生

きた体験は、生涯癒えることのないトラウマとなっているのだ。「絶対に戻らない」と言うのには、そう言わざるをえないだけの根拠がある。そして、その根拠をつくり出した責任は、日本政府に、韓国政府にあるのだ。

この問題を先取りした実践が、韓国ハンセン総連合会運営の Evergreen Welfare Center であろう。「漆谷マウル」の洪完根代表は「あれが忠清北道に造られて、慶尚北道に造られなかったのは残念だ」と嘆じておられた。第2、第3の Evergreen Welfare Center が必要とされているということだろう。このような当事者運動による新たな高齢者施設の建設・運営にあたっては、長年の経験を有する宗教的民間施設とノウハウを共有していくことが肝要であろう。ちなみに、「安東星座園」の第4代園長の辛賢淑女史の説明では、「星座園は、プロテスタントの信仰を土台とした社会福祉法人の経営するハンセン人施設である。費用はすべて公的資金。かつて最も多人数だったときで830名、いまは190名。現在の職員の人数は27名。みなさん、大学を出て、看護師、社会福祉士の資格を持つ。人手が足りない分は、ボランティアが活動してくれている」とのこと。そして、重い後遺症をもち、目も見えない80代のハルモニが、「ここではわたしを人間として扱ってくれる」と喜びを語り、張りのあるいい声でノレを唄ってくださった。

わたしたちの考えでは、日本でも、韓国の「Evergreen Welfare Center」や「安東星座園」のような実践に学んで、国立ハンセン病療養所以外に、ハンセン病回復者が余生を過ごせる施設の建設が急務だと思う。日本でもかつてはいくつかの民間施設があったが、現在では静岡県の「神山復生病院」だけとなった。神山復生病院は、1889年設立の日本では最も古い民間のハンセン病療養所である。ただ、ハンセン病回復者で入院している人はすでに10名を切っており、これまでお世話してきた人たちを最期まで看ようという考えに支えられた実践のように見受けられ、新たな受入れはとくに考えていないようである。

“療養所が嫌なら、一般の老人ホームがあるではないか。退所者給与金をもらっているのだから、そのおカネで入れればいい”という意見もあるかもしれない。だが、退所者のなかには、いまだに残るハンセン病への偏見差別を恐れて、自分がハンセン病回復者であることを他者に打ち明けられないまま社会生活をおくっている人が多い。退所者給与金を受給している80代男性は、聞き取りで「いずれ身体がきかなくなったら、介護を受けなきゃなんない。そうなったら、わたしが月々の退所者給与金をいただいていることが、嫌でもバレる。老人ホームに入るにしても、在宅で介護を受けるにしても、絶対バレる。そ

のときを考えると、ゾッとすると語った。

全国13の国立ハンセン病療養所以外に、ハンセン病回復者たちが、まとまって「終の棲家」として暮らすことのできる高齢者施設の建設が喫緊の課題だ。それは、公的資金によって建設されるが、運営は民間に委ねられるのが望ましい。韓国の「安東星座園」の園長がハンセン人であるように、「退所者」自身のなかから施設長が選任されるのが望ましい。

あともうひとつ、韓国の「Evergreen Welfare Center」が直面する問題があった。2013年9月に訪ねたとき、朴夏慶事務局長は、「2009年開設のEvergreen Welfare Centerは、定員80名のところ、2013年1月時点では入所者56名だったが、健康な家族と一緒に暮らすことは認められないという国の方針のため、元の定着村に戻る人たちも出て、いまは36人に減った。ハンセン人は、社会的な目もあって、親子の縁を切って暮らしてきた人が多い。そういった人たちが、人生の終盤を迎えたとき、もういちど家族として一緒に生活できる場をつくりたかった。また、ハンセン人ではない一般の方と結婚している場合に、夫婦と一緒に暮らせる施設にしたい、と。しかし、費用がかかりすぎるといことで、政府はこの要請を認めないでいる。粘り強く闘っていきます」と述べた。同じ問題は、日本の国立ハンセン病療養所でも、すでに胚胎している。いずれ既存のハンセン病療養所以外のハンセン病回復者施設が造られたときには、同じ問題が表面化するだろう。

台湾の「楽生院療養院」の調査も2014、15年と2度実施したが、まだ問題の全体的状況を把握できるまでには至っていない。しかし、2015年5月に「第11回ハンセン病市民学会」が東京で開催されるにあたって福岡が実行委員会事務局長をつとめたことで、韓国ハンセン総連合会からも台湾の楽生保留自教会からも、ぜひ参加したいとの申し入れがあり、福岡は大会2日目に開催された4つの分科会の中のひとつを「国際連帯」のテーマで企画し、韓国ハンセン総連合会の崔光鉉専務理事、楽生保留自教会の李添培初代会長に登壇していただくなどして、交流を深めた。その点、韓国調査のみならず台湾調査においても、当初の「隔離政策によって罹患者とその家族が受難したハンセン病問題について、日本・韓国・台湾の国際比較研究の確かな足場を築くこと」という最低限の目的は十分達成できた。

とりわけ韓国調査との関係では、2016年5月に、韓国の「国立ソロクト病院」で Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference が開催されたが、第1日目の「歴史と現状」のセッションには、日本から法学者の森川恭剛、歴史学者の藤野豊と社会学者の福岡安則の3名が招待され、研究報告をお

こなった。この「ソロクト百周年行事」では、これまでの調査でお会いした韓国の当事者の方々との再会が果たせ、今後の調査研究の進展のうえで心強い基盤の確立に役立った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

[以下の ~ は韓国語で発表、査読無]

黒坂愛衣・金香月, 2015, 「韓国の定着村訪問記(6)」, 社団法人韓国ハンセン総連合会機関誌『ハンセン』73号, 20-23頁.

黒坂愛衣・金香月, 2015, 「韓国の定着村訪問記(5)」, 『ハンセン』71号, 34-36頁.

黒坂愛衣・金香月, 2015, 「韓国の定着村訪問記(4)」, 『ハンセン』69号, 28-31頁.

黒坂愛衣・金香月, 2015, 「韓国の定着村訪問記(3)」, 『ハンセン』68号, 35-38頁.

黒坂愛衣・金香月, 2014, 「韓国の定着村訪問記(2)」, 『ハンセン』67号, 32-35頁.

黒坂愛衣・金香月, 2014, 「韓国の定着村訪問記(1)」, 『ハンセン』66号, 34-37頁.

黒坂愛衣, 2014, 「ソロクトと定着村 韓国・ハンセン病問題訪問記」, 日本解放社会学会誌『解放社会学研究』第27号, 77-95頁.(査読有)

〔学会発表〕(計1件)

福岡安則「ハンセン病問題最後の課題

日本の家族集団訴訟, 韓国の定着村のこれから」, Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference, May 16, 2016 (韓国, 国立ソロクト病院).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福岡 安則 (FUKUOKA, Yasunori)
埼玉大学・人文社会科学研究所・名誉教授
研究者番号: 80149244

(2) 研究分担者

市橋 英夫 (ICHIHASHI, Hideo)
埼玉大学・人文社会科学研究所・教授
研究者番号: 70282415

黒坂 愛衣 (KUROSAKA, Ai)
東北学院大学・経済学部・准教授
研究者番号: 50738119

(3) 連携研究者

森川 恭剛 (MORIKAWA, Yasutaka)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号: 20274417

一盛 真 (ICIMORI, Makoto)
鳥取大学・地域学部・准教授
研究者番号: 90324996